

学部・研究科 Faculty/School	学科・コース Course
国際人間科学部	環境共生学科

(1) 見たこと/What you saw; (2) 考えたこと/What you thought; (3) 感じたこと/What you felt

コンクリートで囲まれた火山灰を蓄積するための場所で、農業を営んでいる人々を見た。そこで、一度は悲惨な被害をもたらした火山の噴火だが、それが残した栄養豊富な土を利用して、生活を営んでいる人々の強さを感じた。自然災害は人間の力をはるかに超えたもので悲しい被害をもたらすが、その後、肥沃な土という恵みもたらすのだと考えた。また、日常生活を営んでいる場所を、知らない外国人に上から見下ろされ、写真をとられる人々はどのような気持ちなのかと感じた。子供たちは、私たちを見ると笑顔でコンクリートの坂を上ってきて私たちが帰るときも笑顔で手を振ってくれたが、ダムの中で畑仕事をしている大人は一度も私たちの方を見ることなく黙々と作業をしていた。それを見て私は、見学者はどこまで現地の人々の生活に踏み込んでいいのかを考えた。この答えは難しいが、少なくとも見学する際に現地の人に敬意を払うことが大切だと感じた。ロニー先生が言っていたように、インタビューをする際、「質問してもいいですか?」と最初に聞き、自分の目的を押し付けるのではなく、相手の気持ちを尊重することが一番重要であると考えた。ダムの見学ではこのように疑問を抱いたが、逆に、仮設住宅で新たな生活をしているコミュニティの話を聞きに行ったときは、遠くから自分たちの話を聞くためにやってきた私たちが歓迎されているように感じた。そこで、私たちのグループは、火山噴火の前は、近くのゴルフ場で雇われて働いていたが、噴火後、政府からの援助により、牛8頭や、肥沃な土地をもらい、以前より豊かな生活を営んでいる家族の話を直接聞いた。話を聞いた直後は、噴火により家が壊れ、今まで通りの生活が失われたのだから、政府によって豊かな生活ができていのはよいことだと感じた。しかし、後から他のグループから、政府から何の援助ももらっていない家庭もあるということを知り、同じコミュニティで援助に違いがあることに驚いた。コミュニティの結束力を維持するためには、災害が起きたとき、すべての人に同じように平等に援助することが大切だと感じた。

このプログラムでは、異なる国籍、専攻の人たちと2週間同じテーマについて話し合った。私はその中で、人間の優しさ、温かさ、国籍や言語に関係なく友達になることができ、何時間でも楽しく話すことができることを最も強く感じた。先生の英語がわからなかったとき、みんなが優しい英語で教えてくれた。見学施設の中や、バスでの移動中も、インドネシアの人は私が疑問に思ったことを尋ねると、インドネシアの友達と相談しながら、私にわかりやすいように、私が理解できるように、丁寧に教えてくれた。私が詰まりながら話すときには、みんな笑顔で待っていて応援してくれているように感じた。休憩時間にみんなとおしゃべりするのがとても楽しかった。授業中やディスカッションで、自分ももっと英語ができたなら、授業がもっと有意義なものになるし、自分の考えを妥協することなく伝えられ、もっと議論できるのにと、自分の英語力を悔しく思ったことが何度もあったけど、それでもこの2週間は皆の温かい心のおかげでとても楽しく、心から伝えたいと思ったことは何とか伝えることができ、会話を楽しむことができるのだと感じた。様々な背景をもつ人々と一緒に2週間学べるこのプログラムは、民族に関係なく人間の優しさを感じられる最高のプログラムだと感じた。このプログラムでみんなに出会えたことに心から感謝しており、この2週間は一生忘れることのないかけがえのない2週間となった。